

文明のクロスロード 「筑紫」

筑紫つくしという古地名が最初に古文書に登場するのは『古事記』の国生み神話。筑紫島つくしのしま（現在の九州島）の中に、筑紫国つくしのくになど四つの国が生まれたとされています。西暦57年、後漢の光武帝から金印を賜った倭わの奴国なこく王の支配地であり、飛鳥く平安時代には遣隋使や遣唐使が大陸を目指した日本外交史の原点です。以来、筑紫は大陸や朝鮮半島との玄関口として、また東西の文物や多国籍の人々が行き交う文明のクロスロードとして「二千年の街」の歴史を刻んで行きました。

時は下って江戸時代——。戦乱の世が終わり、筑紫は戦国大名として名を馳せた黒田官兵衛・孝高（号・如水）と初代黒田藩主・長政の父子による五十二万石の城下町へ。黒田家の治世の下、武士の街「福岡」と商都の「博多」が、のちに「福博ふくはく」と

呼ばれる双子都市を形成。西洋文化の窓口である長崎に近い地理的条件にも恵まれ、博多商人は隆盛を極めました。

創業年は不明

私共はこの地で、『榮松堂』『森榮松堂』『五十二萬石本舗』『如水庵』と屋号を変えながらお菓子作りを続けて参りました。

創業について「天正年間（安土桃山時代）に、博多の作出町つくりでで、農業を営む傍ら菓子作りを始めた」と代々言い伝えられました。しかし、言い伝えの他には古記録など客観的な証拠が見つかっていないため、創業年は不明としています。作出町（当時は那珂郡犬飼村）とは、のちの出来町できで、現在の福岡市博多区博多駅前1丁目。出来町周辺は博多祇園山笠発祥の地として知られる承天寺じょうてんの他、歴史ある寺社が多く集まった地域です。私共の先祖はこの地



聖福寺開山 650 年遠忌菓子木型

で「松永」姓を名乗り、『榮松堂』という屋号で神社仏閣の御供物菓子を作っていました。

江戸末期の菓子製造の様子を今に伝えるのが、しょうふく聖福寺開山

650年遠忌の際に注文を受けた菓子の木型（弘化2年・1845年）です。聖福寺は、建久6（1195）年に榮西えいさい禅師が開いた国内最古の禅寺です。

また「博多東出来町菓子商松永庄助」の焼印が入った木型も残っています。万延元年生まれの松永庄助（1860〜89）は、庄平（1835〜



松永庄助の焼印

1904）の長男。庄助は父庄平から菓子業を継ぎましたが、29歳で早世。庄平の次男福次郎や三男伊平、四男寅吉も菓子業を営んでいました。

『森榮松堂』の誕生

富国強兵を旗印に近代国家建設を急ぐ明治政府は、明治6（1873）年に徴兵令を發布。家督を継ぐ嫡男以外の男子には、兵役の義務が課されました。松永庄平の三男伊平は、菓子業に専心するため近所の森家の養子となり、森千太郎（1867〜1929）と改名。福岡市出来町十四番地に店を構え、屋号を『森榮松堂』として本格的な菓子作りに取り組みました。

千太郎が生まれたのは、江戸時代最後の年（慶応3年）。明治日本の発展とともに菓子業の基盤を築いていきました。千太郎は生菓子や干菓子が得意で、明治23（1890）年ごろには、「神社仏閣御



「十二会」右端が森千太郎



家紋の菓子木型

供物調進所」として九州・山口一円、約160の神社やお寺に落雁^{らくがん}などの御供物菓子を納入していま

した。またアイディアマンでもあり一般家庭の祝い事や法事の引き出物として、「家紋入り落雁」を発売。個々のお客様の家紋を木型に起こし、特注品の菓子を作って人気を得ました。このころ使われた家紋の木型が、今も多数残っています。一方、千太郎はここで、博多菓子業界の世話役のような立場になっていました。明治35（1902）年ごろ、

博多の菓子屋12軒で研究団体「十二会^{とに}」を結成。千太郎が世話人を務め、自慢の菓子を持ち寄って互いに切磋琢磨したと伝わっています。

そして明治末期に、森榮松堂にとって大きなできごとがありました。明治天皇ご臨席のもとに行われた明治43（1910）年の岡山、同44（1911）年久留米の陸軍特別大演習で、天皇から「御紋菓」のご注文を賜ったのです。千太郎は白装束で身を清め、宮内庁からいただいた天皇皇后両陛下の御紋「十六葉八重表菊形」「五七の桐形」の木型で落雁を打ちました。この落雁は、明治天皇から日露戦争などで亡くなった英霊のご遺族に贈られたそうです。森千太郎、44歳のときのことでした。

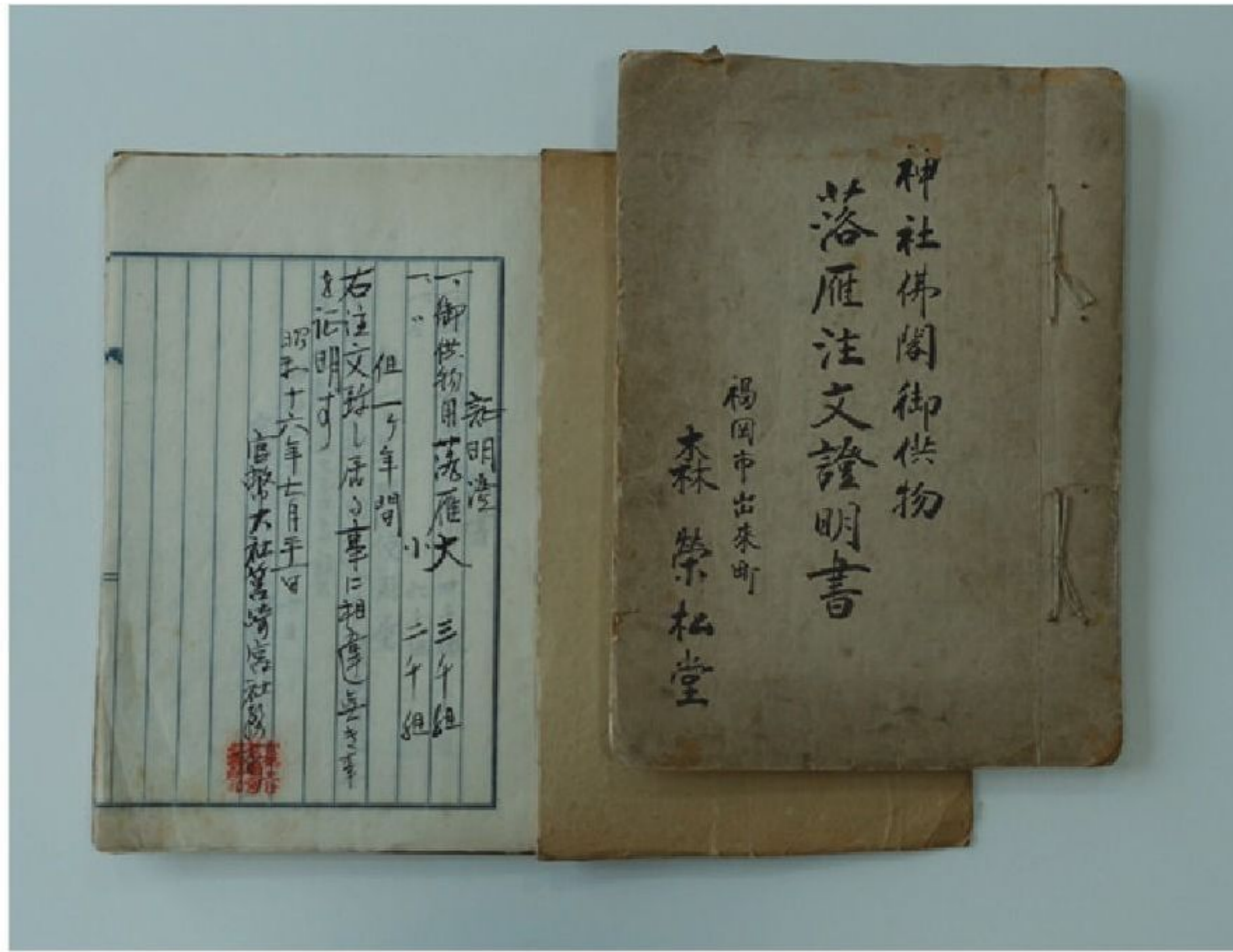


天皇皇后両陛下の御紋菓

『五十二萬石本舗』として再出発

菓子一筋に明治・大正の世を生きた森千太郎は、大正末年に還暦を迎え、昭和4（1929）年に亡くなりました。千太郎には4人の息子がおり、軍人になった四男を除く3人が菓子業を営みました。

森榮松堂を継いだ長男の治三郎は、「神社仏閣御供物調進所」の看板で手堅く経営。昭和10年代後半、世情は日中戦争から太平洋戦争へと物資不足が深刻



神社仏閣御供物落雁注文証明書

化しましたが、神社や寺の供物を作る森榮松堂には特別に原料が配給されていました。注文を記録し配給を受けるための証明書が残っています。そのころ、治三郎

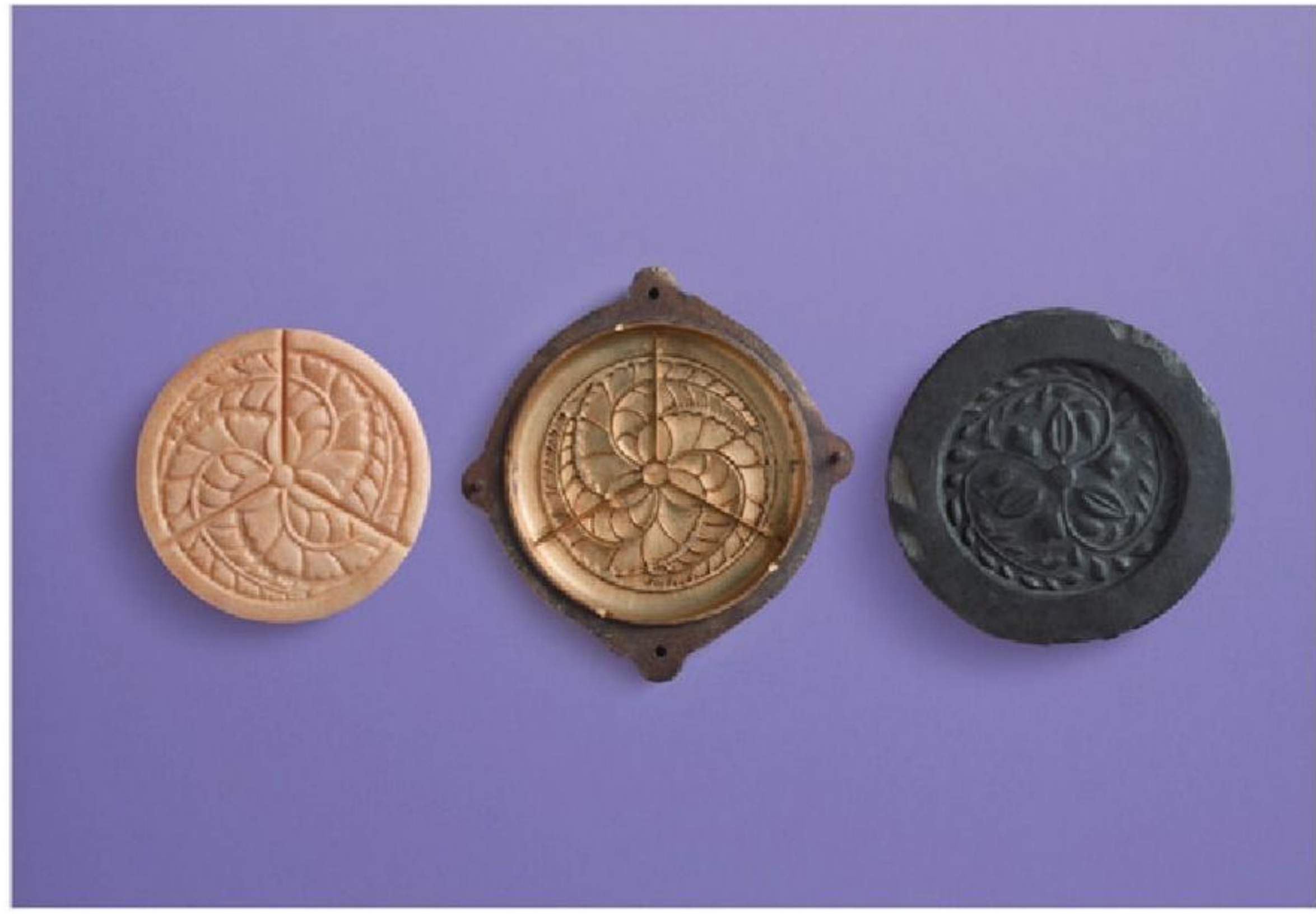
の長男・正美は京都の老舗菓子店「亀屋清永」で7年の修行を終えて博多に戻りましたが、そ

の矢先の昭和17年に応召。太平洋戦争で各地を転戦し、戦争の悲惨さを身をもって体験しました。



出征する正美

戦後帰国しフミエと結婚、恍次郎が産まれます。博多に戻った正美は森榮松堂を再開。しかしもはや神社仏閣の御供物菓子だけでは経営が成り立たず、一般の方にとって頂けるお菓子の開発を迫られます。昭和23年頃のチラシ広告を見ると、京都で修行した腕を発揮して明治の頃まで好評を得た「松風饅頭」を復元したほか、カステラや生菓子など落雁以外のお菓子をつくって売り出していた様子がわかります。とはいえ苦境を脱することはできず、正美は



黒田家から賜った瓦・金型・最中（右より）



森榮松堂のチラシ広告

家14代当主、鳥類学者）をお訪ねしました。長禮公は正美の熱意を受け止めて黒田家の家紋「藤巴」の屋根瓦を贈り、菓子に家紋の使用を許可されました。正美は、いただいた瓦から最中種（最中の

皮）の型を起こし、2年余の試作を経て「もなか黒田五十二萬石」を完成させました。品質に徹底的にこだわり、餡には黒田家発祥の地の「備中大納言」を使用。発売後徐々に評判を呼び、当時人気の「わかせんぺい」「鶴の子」とともに博多三大銘菓と称されるようになりました。昭和30年代に入ると、福博の街でも車社会が本格化。本店そばの踏切は「開かずの踏切」と呼ばれ、森榮松堂は「博多出来町（踏切横）」の菓子店として親しまれました。そして昭和37（1962）年、屋号を『五十二萬石本舗』として法人化し、本店を改装。天神西鉄街などに支店を出し新商品も増え、アジア初の東京五輪（昭和39年）を契機に本格的

暖簾を絶やさぬよう必死でした。歴史の街・京都での修行経験から、「旧福岡藩の地にふさわしい菓子を作りたい」と考えた正美は昭和24年、意を決して父治三郎と東京の黒田長禮公（黒田

て親しまれました。そして昭和37（1962）年、屋号を『五十二萬石本舗』として法人化し、本店を改装。天神西鉄街などに支店を出し新商品も増え、アジア初の東京五輪（昭和39年）を契機に本格的



開かずの踏切と旧本店

な高度成長の時代に突入して行きました。

正美と恍次郎の平和への想い

恍次郎の幼少の頃の記憶。正美が戦友たちを自宅に招き宴席をひらいた時のことです。最初は再会を喜び賑やかでしたが、時間が進むにつれ静かになっていきました。別室にいた幼い恍次郎が不思議に思い見に行くと、みな下を向いて泣いていた。正美は戦争について多くを語りませんでした。普段は陽気な父を含む大人たちがうつむきすすり泣く光景は今でも恍次郎の脳裏に焼き付いています。



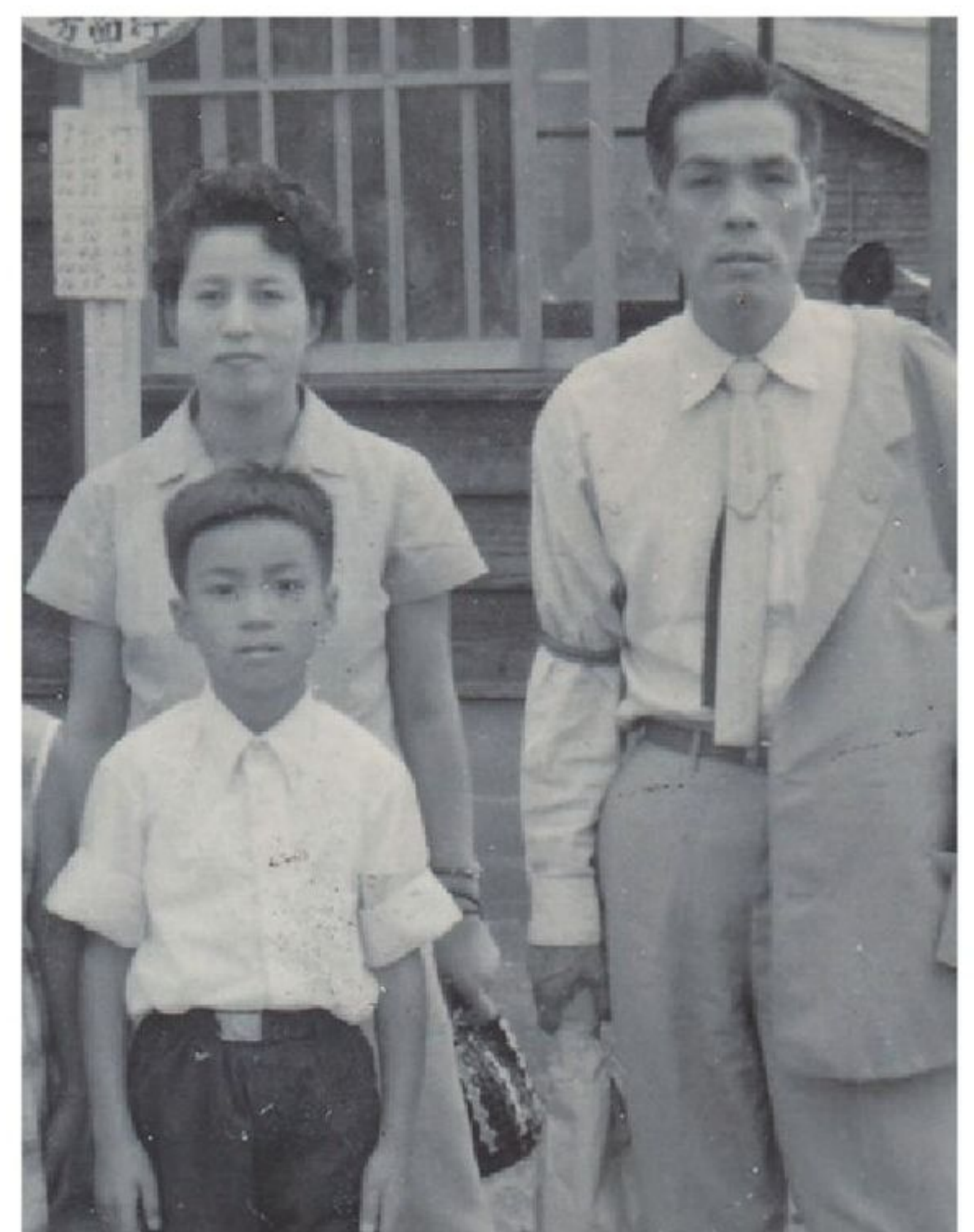
戦地での正美

正美は福岡藩祖である黒田如水に心酔し、恍次郎に「如水公のような男になれ」とよく言っていました。

類まれな知恵で全戦全勝の軍師として恐れられた如水公ですが、まず戦わずして勝つことを考え、戦わざる

を得ないときは極力犠牲者を出さずに勝つことに心を砕いた。そして民が苦しむ戦乱の世を終わらせる為に力を尽くしました。戦争を経験した正美は如水公のこの点に惹かれたといいます。

恍次郎が大学に入った頃、ベトナム戦争への反戦運動が世界的に広まり日本でも学生運動がまっさかり。恍次郎も世界平和のために自分に何ができるかを真剣に考え、卒業したら国連で世界平和のために働くこと決意した大学3年の夏、父正美が死去。苦勞する母を助ける為にも菓子屋を継がねばならない。悩む恍次郎を救ったのは『日本書紀』に記された「わしは今まさにたくさんの平皿で水無しに飴をつくる



正美・フミエ・恍次郎（右より）

う。飴ができたらわしは必ず、武器の力を借りずに座して天下を平定するだろう」という神武天皇の言葉でした。

「世界の平和と言っても、基本となるはじめの一步は家庭の平和。お菓子を食べると心が和み笑顔になる。世界の平和に貢献する力がお菓子にはあるのではないか」恍次郎はこう考え、菓子屋を継ぐ決心をします。

「お菓子は人々にくつろぎを与えゆく平和の使者である」からはじまる新しい経営理念を掲げてスタートした22歳の恍次郎社長。しかし行く手には様々な困難が待っていました。

「もなかの黒田五十二萬石」から 「如水庵の筑紫もち」へ

希望を持って菓子屋の経営を始めた恍次郎ですが、厳しい現実が待っていました。のれん菓子屋の

競争が激化、看板商品のもなか黒田五十二萬石の売上が伸び悩み赤字続き。さらにオイルショックで大打撃を受け倒産の危機に陥りました。一度は廃業を決めるも、廃業するためのお金がない。そんな時に新幹線が博多駅まで開通するというニュースが舞い込んできました。全国から人が集まる博多駅でお客様に喜んでもらえるお菓子を作れば苦境を打開できる。

母フミエの助言で、恍次郎の脳裏に一つのイメージが浮かびます。「小さいころ、蒲池かまち（柳川市）のおばあちゃんが作ってくれたきな粉餅」。材料の吟味を重ね、2年半がかりで試行錯誤し、昭和52（1977）年に誕生したのが「筑紫もち」。二千年の歴史の舞台となった「筑紫」の地名にこだわり、「万葉の詩うたがきこえる筑紫もち」というキャッチフレーズに。パッケージには大宰府「梅花の宴」で詠まれた万葉歌をあしらいました。発売後、フミエ・恍次郎親子の熱意に呼応した従業員の奮闘で売り上げが

伸び、危機を脱することができました。

続いて「如

水庵銘菓撰」という詰め合わせギフトを発売。五十二萬石本舗の赤と黒を基調とした「お城・

石垣・侍」というブランドイメージから、紫色を基調とした筑紫万葉集の世界感への転換をはかりました。

昭和60（1985）年、恍次郎は父が敬愛した如水公にちなみ新しい屋号を『筑紫菓匠 五十二萬石如水庵』としました。翌61年には、秀吉公の箱崎松原茶会から400年を記念し、落成したばかりの福



如水庵銘菓撰



五十二萬石のレッテル

岡市博物館に菓子木型144点を寄贈。その後「株式会社如水庵」から販売部門の「株式会社如水庵」を独立させ、販売店の看板には「如水庵」の名前を掲げました。

平成から令和に改元された際、新元号の出典として「梅花の宴」が話題になり、42年前の発売当初から梅花の宴で詠まれた歌をデザインに取り入れた筑紫もちが改めて脚光を浴びました。

屋号を変え、菓子屋のスタイルを変えながら商売を続けてきたのは、江戸、明治、大正、昭和、平成、令和の激動の世の中で生き残るために必死だった結果。懸命に生き抜いた先人たちの背中に学び、これからも私共は「お菓子は平和の文化。家庭の平和と世界の平和へ貢献する」との思いで、最高峰のお菓子を作り続けます。



如水庵博多駅前本店（2024年現在）

（注）筑紫は「つくし」というのが代表的な読み方ですが、地元では「ちくし」とも発音するため、如水庵ではどちらも「正しい読み方」としています。